世界の聖地と四国遍路

Holy place of the world and the shikokupilgrim

1 J 0 1 C 0 4 6 - 9

氏名 岡慎太郎

指導教員 主査 寒川恒夫 先生 副査 石井昌幸 先生

私は2003年に、四国八十八箇所霊場巡り（お遍路さん）を行いました。お遍路さんは、四国に点在する弘法大師（空海）ゆかりのお寺88箇所を巡拝し、ご利益を願う長旅であり、阿波・徳島から始まり、土佐・高知、伊予・愛媛、最後に讃岐・香川という順番で四国を一周する、全行程1400キロメートルの道のりです。私はこれを自分一人で、45日かけて、徒歩のみで周りきりました。大雨や台風の中でも前に進み続けたあの経験は、あれから三年経った今でも強く思い出に残っています。お遍路さんは最近では映画やテレビドラマで取り上げられたり、四国の観光名所や癒しのたびとして実にはわかなブームとさえ言われています。

本研究は、お遍路さんが一体、どのような特徴を有する巡礼なのかを、国内・国外の巡礼と比較して明らかにしようとするものです。

第一章では、巡礼は世界の多くの宗教で重要な宗教儀礼となっているが、そもそも巡礼とはどのような構造をとっているのかについて述べています。巡礼は居住地である日常空間、俗空間を一時離脱して非日常空間、聖空間に入り、そこで聖なるものに近接、接触し、その後、再びもとの日常空間、俗空間に復帰する行動です。また、世界各地の多様な巡礼を、その特色によっていくつかのタイプに分類することができます。「集団型」と「個人型」、「限定型」と「解放型」、「円周型（経巡り型）」と「直線型」、「静寂（修行）」型と「激奮（祭り）型」、「国境を越えていくタイプ（国際的巡礼型）」、「同一国家内の遠隔地へ行くタイプ（国家的巡礼型）」、「狭義の生活空間や生活空間を越えていくタイプ（地方巡礼型）」など、様々な分類が出来ます。

第二章では国外、国内の代表的な巡礼を「円周型」と「直線型」で分類して、それぞれの巡礼を説明しています。「円周型」ではお遍路さん、関西の西国四十四箇所、国内の観音巡礼、チベット仏教を取り上げています。「直線型」ではイスラム教、キリスト教、伊勢参り、富士山詣を取り上げています。

お遍路さんとは、仏教の一派・真言宗の開祖である弘法大師・空海によって四国に八十八箇所の霊場が開かれ、後世の人々がゆかりの寺々を巡拝することが、その意味付けの第一とされています。しかし、史実からいうと空海よっ

て八十八ヶ所の霊場が開かれたというのは、やや信憑性の薄い事実です。なぜなら、それを証拠立てる信頼性のある十分な資料が欠けているからです。こうした事態を招いたのは、ひとつには江戸期の四国遍路巡拝者の中核となった社会階層が、上層階層ではなく中・下層階級であったことにもよります。・・・・・・以下は本文に続く。

第三章では四国遍路の文化と題して、各寺の故事来歴、私自身の体験談を載せました。最後の第八十八番のお寺に参るとき、私はわずかな達成感や感動を感じはしましたが、何か精神的に重い問題を抱えていたわけではなかったし、金銭的に苦しく野宿を重ねるなどの苦しさはなかったもので、こんなもんなのかと案外さっぱりしていました。両親や、私が四国遍路をやり遂げたことを聞いた人は、すごいことをしたねとほめてくれるのですが、私自身にはやりきったことのすごさや効果の実感はありません。しかし、今回こうして卒業論文作成のためにいろいろな資料を読んで研究して思ったのは、はるか昔から数え切れないほどの日本人が行ってきたお遍路さんを、自分がこの生涯のうちに行えたことは感慨深いと思います。

結章には自分が感じた四国遍路の独自性をまとめています。国外の巡礼と四国遍路を比較して、私は四国遍路が、四国という大きな島全体の外縁を一周するような巡礼路をとっている点に独自性を感じました。このことで四国全土が聖地となり、本州、九州からの巡礼者にとっては「聖地に入る」という特別な意識をもつことを可能にし、それぞれの遍路者がそれぞれの遍路で得たり、感じたりするものに影響を与えていると思います。

今回こうして研究したことで、この次行くときは以前とは違った思いや視点で遍路ができると思うので、いつかもう一度やってみたいと思います。